

『模庵白純大和尚』より

わが先師のガードマン白純大和尚

大本山總持寺監院 大道晃仙

わが先師、英仙老和尚が遷化したのは昭和三十一年一月二十六日で、世寿八十一歳であった。早いもので来る十月二十五日、二十六日の両日、紫雲台猊下を拝請して二十七回忌法要を修行することになった。

さて、先師が七十六歳の老軀をもつて總持寺監院に就任したのは昭和二十六年六月の下旬のことであり、雲仙丸に乗つて釧路港を発つた老父の姿が今ではつきり思い出される。大戦後

の一山復興の重責を担つての監院の就任であり、先師は復興局の総裁に、その局長に副監院黒田白純老師を挙げ、東奔西走の日々を過したのであつた。監院在任四ヶ年の間、先師の側近にあって補佐役をつとめられたのが黒田白純老師であつた。春風和顔の老監院と威風堂々闊達自在の白純老師は全く名コンビであつたと思う。特に昭和二十七年十月、時の貫首渡辺玄宗猊下、大祖堂再建の発願なさるるや、先師は白純老師

と共にその実勤に入られた。陰に陽に老監院を助け、時には代行をつとめられた白純老師の姿がなつかしく思い出される。

白純老師には男のお子が七人あられた。住職の留守に、寺庭をしつかり守り、大勢の子供を養育され、檀信徒によく尽された奥さん。その奥さんに留守を一任して活躍された白純老師の風格をなつかしむ昨今である。白純老師は子育ての名人であり、今日大勢のご子息がそろつて宗門にあり、縦横の手腕を発揮しておられることは、誠に敬服の至りである。

さて、昭和三十年八月初旬、先師は監院満期により帰山、自坊においてその報告法要と亡き母の七回忌法要を修行し、特に母の法要の導師を私は白純老師にお願いした。白純老師の堂々たるお導師の姿、朗々たる香語の音声は堂中を圧するが如しだった。

法要が終わり、本山を代表して白純老師が立

ち、曰く「私は四年間、監院さんの側近にあってお世話を申しあげた。私は幸いにして柔道五段で、監院さんのガードマンの任務を充分果すことができた。私は今回本山を代表してお送り申し上げた。檀家の皆さまに監院さんをお渡し申し上げます。今後はよろしく」と申したるところ、古い檀徒の一人であつた中川久平氏、すつと立つて曰く「貴僧は柔道五段と聞き及ぶが、拙者は山岡一刀流六段鍊士である。これからは拙者が老僧の用心棒をつとめるによつて、貴僧は安心して本山にお帰りあれ」と。その一瞬、白純老師と久平居士の当意即妙の問答に満堂の檀信徒一同爆笑大爆笑……。先師また破顔微笑……。

ここに粗文ながら思い出の一端を記し、白純老師の品位増崇を祈念申し上げる。　合掌

(昭和五六年一月二十六日夜　釧路市定光寺住職)